

ハモ構文の表現機構

—— 古典語における「は」「も」の共起に関して（その二） ——

坂 田 一 浩

はじめに

本稿の目的は、「AはBも」の形式をとる、係助詞「は」「も」の共起形式（以下これを「ハモ構文」と呼ぶ）が、古典語においてひとつの構文類型として確立していたということ、統計的調査や類似構文との比較等を通して論証することにある。それは同時に、この構文が古典語においてどのような機能を果たしていたかを明らかにすることにもつながるであろう。考察にあたっての資料としては万葉集および三代集を用いるが、調査対象は短歌形式のものに限った。本論文のように構文を問題とする場合、比較検討はできる限り同一形式の例を用いるべきであるとの判断からである。なお万葉集に関しては、「は」「も」の一方で補読されている例は、これを対象から除外した。

一、ハモ構文の全体的傾向

まずはじめにハモ構文の実例を、文末表現ごとに分類した上で掲げてみる。

故郷は(者) 遠くも(毛) あらず一重山越ゆるがからに思
ひぞ我がせし (万葉一〇三八)

阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくは(者) 止む
時も(毛) なし (同 三三四四)

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせ
ず (古今三三八)

八重葎しげきやどには夏虫の声よりほかにとふ人もなし
(後撰一九四)

(以上、打消)

佐保河の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は(者) 年

にも(母)あらぬか (万葉五二五)

白たへの袖かれてぬるぬばたまの今夜は(者)はやも(毛)

明けば開けなむ (同 二九六二)

たまほこの道はつねにもまどはなん人をとふとも我かとお

もはむ (古今七三八)

なきなのみたつたのやまの麓にはよにもあらじの風もふか

なむ (拾遺五六一)

(以上、願望)

あをによし奈良の宮には(者)萬代にわれも(母)通はむ

忘ると思ふな (万葉八〇)

近江路の鳥籠の山なる不知哉川日のころころは(波)恋つ

つも(裳)あらむ (同 四八七)

花のごと世の常ならば過ぐして昔はまたもかへりきなま

し (古今九八)

もみぢ葉のながるる時は竹河のふちの緑も色かはるらむ

(拾遺一一三二)

(以上、意志・推量)

かくはしき花橘を玉に貫き送らむ妹は(者)みつれても

(毛)あるか (万葉一九六七)

山遠き都にすればさ雄鹿の妻呼ぶ声は(者)ともしくも

(毛)あるか (同 二二五二)

女郎花にほへる秋の武蔵野はつねよりも猶むつまじきかな

(後撰三三七)

いとよるものならなくに別れぢはこころぼそくもおもほ

ゆるかな (拾遺三三〇)

(以上、詠嘆)

春日山おして照らせるこの月は(者)妹が庭にも(母)さ

やけかりけり (万葉一〇七四)

天河雁ぞとわたる佐保山の梢はむべも色づきにけり

(後撰三六六)

散りぬべき花みる時は菅の根の長き春日もみぢかかりけり

(拾遺五七)

(以上、けり止め)

恋ふといふは(波)えも(毛)名付けたり言ふすべのたづ

きもなきは我が身なりけり (万葉四〇七八)

かく恋ひむものとは我も思ひにき心のうらぞまさしかりけ

る (古今七〇〇)

なかたえて来る人もなきかつらぎの久米路の橋は今もあや

ふし (後撰九八六)

(以上、肯定表現)

右の諸例に現れている「は」「も」に関して、(1) おのおの

が承ける成分、(2) 係り先の文末表現、(3) 意味用法、の三点に注目してその傾向をみてみたい。

まず(1)について。今試みに万葉集に関して、「は」「も」がそれぞれいかなる成分を承けているかを表にしてみると、次のようになる(表1)。

表1

	「は」	「も」
条件句	8	4
時格	6	5
場所格	4	2
二重主格	16	
主格	30	4
対格、等格、格与	3	4
補格	0	3
副詞	0	13
述語分節	0	16
計	67	67

これによれば、「は」は主格、時格、条件句といったような、題目となりやすい成分を承けている例が多い一方で、「も」は述語分節^②を形成したり、或いは副詞を承けたりするものが多数を占めている。

次に(2)に関しても、(1)と同様、万葉集を対象に調査してみると、次のごとき表を得る(表2)。

表2

打消	26
嘆詠	9
願望	6
意志	5
推量	8
条件	3
肯定表現	8
けり止め	2
計	67

右の表を一瞥してまず気がつくのは、この構文においては文末に打消・願望などの非肯定表現をとるものが大多数を占めるということであろう^③。とりわけ打消表現をとるものは、全体の約三分の一と極めて高い比率を示している。

さらに「は」「も」のおのの意味用法に目をやるならば、「は」においては題目提示の機能を果たしているものが多数を占めているのに対して、「も」は、係り先の打消・願望などの表現と密接に関連しつつ、最小限の事象、あるいは一例としての事象を提示している、『陳述依存の『も』』であるものが多いということが看取されるのである^④。

ハモ構文における「は」が多くの場合において題目提示の助詞として機能しているということ、それはとりも直さずこの形式が、全体として題述構造をとっているということの意味する。今あえてこれを図示するならば、

(提示部)

(説述部)

【ひぐらしのなく山ぎとの夕ぐれ】は

【風よりほかにとふ人もなし】

【雲居までたちのぼるべき烟かと見し】は

【思ひのほかにもあるかな】

【人しれぬわがこよひぢの関守】は

【宵宵ごとにもうちもねななむ】

のようになるものと考えられる。このような構造の中にあつて「も」は、説述部中の助詞として文末表現との密接な関連を保ちつつ機能しているといえるのである。

二、ハモ構文をひとつの構文様式として

認めることの根拠

前節において指摘した諸特徴は、しかしながら見方をかえれば、「AはBも」というこの形式をひとつの「構文」としてとらえることの妥当性を、逆に否定する材料ともなりそうである。すなわち既述のように、この形式において「は」が題目提示を、また「も」が陳述依存の用法を示す傾向にあるのは、「AはBも」という出現順序からくる必然としての、文中における位置に起因するものであつて、「は」は文の上部においては題目提示のニュアンスを帯びやすく、また「も」が文末近くに出現す

ると、当然陳述との関連性が強くなる)、従つて「は」「も」の協調による、構文としての必然性をそこに見出すのは的外れではないかという見方である。

また、この形式における「は」「も」の意味用法に如上の傾向がみられるにせよ、その用例をつぶさに検討するならば、その他のいろいろな用法のものが見出され、その組合せもさまざまである。その点では両者の間に意味上の共起制限は存在しないかのように見える。そこから、ハモ構文に共起している「は」「も」の間に必然的な関連性が認められるのか、ひいてはこの形式がはたして「構文」としてとりあげるに足るものなのかを疑問視する立場もありえよう。つまり以上見てきたハモ形式における「も」の陳述との呼応、およびそこから生じてくる意味用法は、先にも触れたように単出の「も」においてもやはり(統計の上では上述のように或る一定の傾向があるにしても、個々の用例について見た場合)同様に確認され得るものであり、「は」を伴つたからといつて格別「も」の語性が変容、あるいは特定の用法に限定されているとはいひがたい。以上の二点から、ここでハモ構文と名付けた形式中の「は」「も」は偶発的に現れたものに過ぎず、それをことさら構文としてとりたてるには当たらないという見方も出来そうである。

しかし、三代集において、総計四千首近い歌のうち、ハモ形式をとるものは一七二例見出される。これは全歌数のほぼ4%を占める。和歌における表現の類型性ということを考慮したと

しても、否むしろ類型化されているからこそ、このように多くの用例をもつに至った要因、また類型化を促した要因というのが考究されなければならない。そこにはやはり「は」「も」の構文上の関連性を想定せざるを得ないのである。

このような推定を裏付ける根拠として私は、次の三つの事例を提示する。まず一つは、ハゾ構文との比較である。北原保雄(一九八一)・大野晋(一九九三)の両氏^①は、

梓弓弦緒取りはけ引く人は(者)後の心を知るひとそ(會)引く (万葉九九)

秋萩の咲きたる野辺は(者)さを鹿そ(會)露をわけつつ妻問ひしける (同二二五三)

はかなくて夢にも人をみつる夜はあしたのどこぞおきうかりける (古今五七五)

いその神ふりにし恋の神さびてたたるに我はねぎぞかねつる (拾遺八六二)

右のような、「AハBゾ」という「は」と「ぞ」による係助詞共起の形式を、題述構文という、情報伝達に不可欠な構造である点、および現代語において基本的構文とみなされる「象ハ鼻ガ長イ」のようなハガ構文の祖型であるという点、以上の二点から古代日本語における基本的な構文と位置づけている。確

かにこの見解は、古代語資料における用例の多さからみても(例えば古今集においては、後に触れるように全歌数千百首中、四七例確認できる)、また現代語におけるハガ構文との親近性からみても首肯し得るものであるが、今ハモ形式を、このハゾ形式と比較してみた場合、次の三点から両者の密接な対応関係を認めざるを得ないのである。

まず、三代集中の両形式において、そこに現れた係助詞各々が承けている成分の組合せのうち、数の多いものから五つを(今一方の形式の用例数をも示しつつ)挙げてみると次のようになる(表3)^②。

表3

成分	ハモ	ハゾ
二重主格	27	10
主格—述語分節	18	49
時格—主格	13	11
場所格—主格	8	6
対格—主格	8	5
主格—副詞成分	7	3
主格—補格	5	9
対格—補格	2	10

その結果、両者は重なり合う部分が多く、かつ双方ともに、「は」は時、処、(二重主格構文における)総主格などの題目となりやすい成分を提示しているものが多く、一方「ぞ」と、構造上それに対応していると見られる「も」はいずれも述語分節、補格、および(二重主格のうち)部分主格など、説述部中において機能しやすい成分を承けているケースが多いということが確認できる。このことは、両形式が、「は」において題目を提示し、かつ「ぞ」あるいは「も」が説述部中の要素をとりたてるという共通した機能を担うものであることを示している。また次のような対比は、その親近性を如実に示すものであろう。

・常世物この橘のいや照りにわご大君は(波)今も(毛)見
る(と)

奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は(波)今
そ(曾)鳴くなる (万葉四〇三三四)

・くれなゐににほふがうへの白菊はをりける人の袖かとも見
ゆ (伊勢物語十八段)

卵の花の咲ける垣根はみちのくの籬の島の浪かとぞ見る
(拾遺九〇)

・雲居までたちのぼるべきけぶりかと思しは思ひのほかにも
あるかな (後拾遺九九〇)

有磯海浜のまさごと頼めしは忘るる事のかずにぞありける

(古今八一八)

・夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけずもあらな
ん (後撰一〇一九)

しきたへの枕のしたに海はあれど人を見るめはおひずぞあ
りける (古今五九五)

・黒髪の色ふりかはる白雪のまちつる友はうとくもあるかな
(古今六帖二九九八)

けふの日のさしててらせば船岡のみぢはいとどあかくぞ
ありける (躬恒集一九二)

・涙さへ時雨にそひてふるさとば紅葉の色もこさまさりけり
人はいさ心も知らずふるさとば花ぞ昔の香ににほひける
(後撰四五九)

(古今四二二)

次に、両形式の文末表現について、拾遺集を資料として調査
してみる(表4)。

表 4

	ハモ	ハヅ
打 消	29	1
詠 嘆	7	0
願 望	3	0
意 志	2	0
推 量	3	4
命 令	0	0
条 件	0	0
疑 問	0	0
けり止	4	25
肯 定	4	21
計	52	51

右の表を見るに、ハモ構文においては、さきにも触れたように打消文末の占める割合が格段に高くなっているもの、他にも詠嘆、願望、意志、推量など、さまざまな表現がみられるのに対して、ハヅ構文においては肯定表現およびけり止めに着しく偏っていることがわかる。さらにここで、ハモ構文において肯定文末の占める割合が極端に低くなっているという事実を目をやるならば、両者の数値が一種の相補分布をなしているのではないかとこの見方も出来そうである。すなわち、肯定表現をとる題述構文は主としてハヅ構文が担い、これに対して打消、願望、詠嘆等の表現をとるものはハモ構文がその役割を担っているといえるのではなからうか。

また用例数からみても、ハモ構文はハヅ構文に匹敵する数を示しており、古典和歌においては頻繁に見られるものである。

今試みにその比率を三代集によって調査してみるならば、古今集ではハヅ構文四七例に対してハモ構文四三例、一方後撰集においてはハヅ構文六七例に対してハモ構文七七例、さらに拾遺集ではハヅ構文四七例に対してハモ構文五二例というように、ほぼ拮抗、ないしはハモ構文が上回っている。

以上の三点から、ハモ構文は、ハヅ構文と相補う関係にある、古代語における基本的な題述構文であるということがいえる(10)。この両形式はともに、

(提示部)

(説述部)

【雲居までたちのぼるべき烟かと思し】は

【思ひのほかにもあるかな】

【ありそうみの涙のまさことたのめし】は

【忘るることのかずにぞありける】

右に図示したように、「は」によってまず題目としての事象を提示し、かつそれについて述べる説述部においては「も」あるいは「ぞ」がその中の或る要素(通常それは、表現主体にとりて特に強調すべきものと意識された成分なのであるが)をとりたてるといふ構造を有しているのである。

ところで、文中において他の係助詞と共起することなく単独で現れている「も」(以下「単出の』も」と呼ぶ)も、特定の

陳述と呼応しているものは何らかの題目となりうる成分を伴っていることが多い。例えば次のような例である（用例はすべて古今集による）。

櫻花とく散りぬとも思ほえず（八三）

時鳥声も聞こえず（一六一）

白雪の所もわかず降りしげば巖にもさく花とこそみれ（三二四）

秋来れど色も変わらぬ常盤山（三六二）

烟立ち燃ゆとも見えぬ草の葉を（四五三）

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば（二三七）

櫻花た折りても来む見ぬ人のため（五四）

これらの例においては、傍線部の無助詞体言や被修飾語①、および「の」をともなった体言が、「も」を含む節に対しては題目に立ちうる成分となっている。このことは次のような対照において一層明瞭であろう。

・秋来れど色も変わらぬ常盤山

春雨にいかにも梅やにほふらんわがみる枝は色もかはらず

・いとによるものならなくに別れぢはこころぼそくもおもほ

ゆるかな

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば

今これを統計的に示すならば、古今集においては打消の「ず」と呼応する単出の「も」四八例のうち約66%にあたる三二例が、また詠嘆の「か（な）」と呼応するもの四五例中約40%に相当する一八例が題目に相当すると見得る無助詞体言を伴っているか、または連体修飾句中にある。このことは、陳述と呼応している「も」は単出の場合であっても本来的に何らかの題目に相当する成分を要求するものであることを示すものではなからうか。それは特定の陳述と呼応する「も」が、説述部中において機能することから来る必然の結果であると考えられ、「は」は、題目相当語をそれと明示するために現れているものと見ることができであろう。

以上の二点とならんで今一つ、ハモ構文をひとつの「構文」としてとらえることの妥当性を裏付けるものとして、この構文中の「は」「も」の、文末表現に対する相互規制の事実を挙げることができる。詳細は前稿に譲るが②、一見「も」によってその文末表現が一義的に決まるかのように見えるこの構文を単出の「も」と比較した場合、詠嘆表現の占める割合が半減している一方で、けり止めの割合が著しく増加していることを知る。

このような現象の背後には、実は「は」による規定が大きくはたらいっているのである。

これまで述べてきた三つの根拠、すなわちハゾ構文との間に密接な対応関係が認められるということ、またハモ構文に多く見られる陳述呼応の「も」は、単出のケースにおいても「は」によつて提示され得る題目語をともなっている場合が多いこと、さらに「は」「も」による文末への相互規制の存在によつて、ハモ構文を古典語における一つの確固とした構文形式と見るべきであることが明らかになった。

おわりに

以上の考察から、ハモ構文の特徴として次の点が指摘できる。

- 1、「は」は一文における題目となりやすい成分を承けていることが多く、一方「も」は述部近くに位置する成分を承けていることが多い。
- 2、その文末は、打消、願望などの非肯定表現をとることが多い。
- 3、「は」「も」の意味に関して、あらゆる組合せがあり得、その点で両者の間の意味上の共起制限はかなり希薄であるが、おしなべて

題目提示の「は」十陳述依存の「も」

というケースが多い。

4、従つてハモ構文は基本的に題目提示の形式をとる。その際、「は」は一文中の題目を提示し、「も」は叙述部中の成分をとりたてる。

5、ハモ構文は古典語において典型的な題述構文であるハゾ構文と相補的な関係にある文型であり、前者が主として肯定的、断定的な表現をとるのに対し、後者は非肯定的、含蓄的表現を主にとる。

【注】

- (1) 本論文は、同じく「は」「も」共起構文でありながら「AもBは」の形式をとるモハ構文について論じた拙稿(二〇〇三b)と対をなすものである。また、これらハモ・モハ両構文を含めた、係助詞共起の構文(私にこれを「多係助詞構文」と名付ける)に関する総合的な私見は、拙稿(二〇〇三a)において論じておいた。重複すると思われる点についてはこれら前稿に譲った場合も多い。参考照いただければ幸いである。
- (2) この「述語分節」という用語に関しては、川端善明(一九六三b)の定義に従う。

具体的には、次のようなものである。

心なき雨にもあるか人目もりともしき妹に今日だに逢はむを

(万葉三二二二)

つれもなくあるらむ人を片思ひに我は思へばわびしくもあるか

(同 七七一)

(3) 三代集においてもハモ構文の全用例中、約八割にあたるものが非肯定表現をとっている。これに関する数値の詳細は、拙稿(二〇〇三)の付表を参照。

(4) ここに挙げた「は」「も」の意味用法の分類に関する私見は、拙稿(二〇〇三b)において詳しく論じておいたので、そちらを参照されたらいい。

(5) 例えば、

月夜には|それとも|みえず梅の花香をたづねてぞしるべかりける

(古今四〇)

の「は」には排他・限定的なニュアンスが強く感じられ、また、

鶉にあらぬねにても聞こえけむ明けゆくときは|我も|なきにき

(伊勢集一六六)

散りぬべき花みる時は|菅の根の長き春日も|みちかかりけり

(拾遺 五七)

のように文末が単純な肯定表現または「けり」で終止する場合には、

「も」は同類事象の暗示や極端例の提示など、陳述の制約を受けることの比較の少ない用法のものが多く見られる。

(6) 北原(二九八一)、二七八頁以下。大野(一九九三)、二〇二頁以下。

(7) ハモ・ハソ両形式の比較において万葉集における調査結果を示さなかったのは、万葉集ではハモ構文が六七例見出されたのに対しハソ構文は二二例であり、用例数の開きが大きかったためである。大野晋(一九九三)は、『ハ……ハ……ソ……連体形』という型は万葉集に極めて多

い(二〇五頁)と述べているが、私に調査したところによれば、長歌・旋頭歌を合わせても、万葉集中のハソ構文の用例は二七例であり、それほど多いとは思われない。おもうに万葉集においては、まだ古今集以後ほどには確立した構文としては成長していなかったのではあるまいか。

(8) この表において、ハソ構文に占める「主格―述語分節」の割合が突出しているのは、

秋風にこゑをほにあげてくる舟はあまのとわたる雁にぞありける

(古今二二二)

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

(同七九五)

たちちねの親のいさめしうたた寝は物思ふ時のわざにぞありける

(拾遺八九七)

のように、三代集中「――は――にぞありける」という形式が半ば固定化しつつ多用されているためであり、またハモ構文において二重主格の数値が際立っているのは、

あしひきの山のまにまにかくれなうき世の中はあるかひもなし

(古今 九五三)

天の河水まさるらし夏の夜はながるる月のよどむまもなし

(後撰 二一〇)

目も見えず涙の雨のしぐるれば身のぬれぎぬはひるよしもなし

(同 九五五)

のように「――は(用言+形式体言)もなし」の形式をとる例が多数存在するためである。このように両形式はおの独自の表現領域を示

してはいるが、その文型を総体的にみれば、互いに共通する要素が多いのである(本表においても、両形式ともに上位三つ)には「主格―述語分節」「二重主格」「時格―主格」の組合せが現れている。

(9) ここであえて拾遺集の調査結果を挙げたのは、両形式おのおのの用例数がほぼ同数であるため、用例数によって容易に比較できるといふ便宜な理由によるが、万葉・古今・後撰各集においてもほぼ同様の相補分布的傾向を得る。

(10) ハモ、ハソ両形式の関連性はまた、そこに含まれている係助詞「も」「ぞ」の、成立過程における親近性からも裏付けられるように思われる。すなわち係助詞「ぞ」は、大野晋(一九九三)によれば、本来文末助詞であったものが文中に倒置されたことによって成立したものである。実は係助詞「も」の成立についても、文末助詞「も」との密接な関連性を想定する説が川端善明(一九六三b)や森野崇(一九九六および一九九七)によって提出されている。例えば、

悔しくも老いけるかも我が背子が求むる乳母に行かましもを

(万二九二二)

うれたくも鳴くなる鳥かこの鳥もうちやみこせぬ (記 神代)

において、「悔しく」「うれたく」はそれぞれ「老いける(コト)」「鳴くなる鳥」について説述をなしているものと見られ、その意味では「逆述語」(川端氏)であるとも言い得るものであり、この点で、

天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも

(万三二四六)

のような文末助詞「も」の例と、文構造の面でも、また情意の表出とい

う意味の面でも連続性が窺えるとされている。大野(一九九三)はまた、「も」「ぞ」ともに疑問詞を承け得ることから、それらを聞き手にとつて未知の事象を提示する助詞とした上で、疑問詞を承けず、既知の事象を提示する「は」等と対立する系列のものとして位置づけている。もし以上諸氏のこのような見解がいずれも正しいとするならば(このような前置きが必要という点では多少蓋然性の低いものとなるが)、文構造の面での両形式の類同性は、より確固としたものとなるであろう。ともあれ、古典語における係助詞「も」と「ぞ」の間にみられる共通した性格に關しては、もつと検討されてしかるべきものである。

ところで、古典語において通常「も」と対比される係助詞は「は」である。従つてハモ構文と対応させるべきはハソ構文よりもむしろ、

夕されば小倉の山に鳴く鹿は(者)今夜は(波)鳴かずいねにけらしも (万葉一五一一)

もだあらじと事のなぐさに言ふことを聞き知らくは(波)からく

は(者)ありけり (万葉二二五八)

春日野はけふはな焼きそわか草のつまもこもれり我もこもれり

(古今一七)

右の諸例のようなハハ構文なのではないかという疑問は、当然起こり得るところであろう。今この構文の実例を子細に検討するに、次のような特徴が浮かび上がってくる。

まず万葉集に關して、当該の構文中の二つの「は」が承けている成分を調べてみると、全四十例中半数を占める二十例が、主格と時格の組み合わせであり、ことに二番目の「は」が述語分節をなしている例は三例

しか見出されない。これはさきにみたハモ構文における傾向とは異なっている。

一方、文末表現に関しては、同じく万葉集において、

打消・九ノ詠嘆・三ノ願望・〇ノ禁止・三ノ意志・三

推量・八ノ条件(逆接)・六ノ肯定表現・六ノけり止め・二

.....計四〇

という数値を得る。ハモ・ハソに比して、割合どの表現にも均等に分布しているのが特徴的である。

また、ハハ構文の用例は、古今集以後になると極端に減少する。古今集では五例、後撰集では七例、また拾遺集では四例を数えるのみであり、ここではハハモ構文に匹敵しうる勢力を有していないように見える。以上の点を考え合わせるに、古典語においてハハ・ハモの両構文が確固たる対応をなしていたとはみなし難いのである。

さらに今一つハモ・ハソ両形式と相補的な関係にあるものとして、三代集においてはハヤ構文の存在を挙げることが出来る。この形式は係助詞「や」のはたらきによって、ハモ、ハソにおいては表現し得ない判定要求の疑問を表明することが出来るという点で、上述の二形式を補うものであり、「は」「や」各々が承ける成分も、両形式と軌を一にするものである。また、その文末表現は、「む」「らむ」および肯定形に集中している。ちなみに古今集において確認できるのは二〇例。同集のうちからそのいくつかを挙げる。

春霞たつを見すてて行く雁は花なき里にすみやならへる(三二)
年を経て花の鏡となる水は散りかかるをや曇るといふらむ(四四)

夏と秋とゆきかふ空のかよひ路はかたへ涼しき風やふくらむ

(二六八)

秋の夜の明くるもしらず鳴く虫はわがごどものや悲しかるらむ

(二九七)

もみぢせぬ常磐の山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ

(二五二)

(11) 連体修飾が題目提示と何らかの関連を有する機能であることについては、北原保雄(一九八一)に次のような指摘がある。

観客がとてもよく入った 今日(1)の甲子園球場であります。

説明 提示

これは、どういう情報が新しく伝えられているかという点から見ると、

今日の甲子園球場は 観客がとてもよく入った。

提示 説明

に近い表現である。(一八五頁)

(12) 拙稿(二〇〇三a)第三節。

本論文において使用したテキストは、万葉集、三代集ともに新大系本によった。ただし、表記等、若干改めたところもある。

参考文献

川端善明(一九六三a)「助詞『も』の説—文末の構成—」『万葉』四七号
——(一九六三b)「助詞『も』の説—二、心もしのに鳴く千鳥かも—」

『万葉』四八号

北原保雄（一九八二）『日本語の世界5 日本語の文法』中央公論社

大野晋（一九九三）『係り結びの研究』岩波書店

森野崇（一九九六）『奈良時代の終助詞『も』に関する考察』

『二松学舎大学論集』三九

——（一九九七）『奈良時代の係助詞『も』に関する考察』

『二松学舎大学論集』四〇

拙稿（二〇〇三a）

『多係助詞構文』という視点—

三代集における『も』と他の係助詞との共起—

『熊本大学社会文化研究』1

——（二〇〇三b）

『もみち葉もぬしなき宿は色なかりけり』—

古典語における『は』『も』の共起に関して—

『国語国文学研究』（熊本大学）第三十八号

付記 本稿は平成十三年度提出修士論文の一部に加筆訂正したものである。

また前稿も含め、私見をこのような形でまとめるにあたっては、指導

教官の伊原信一・坂口至両先生をはじめ、青木博史、木下書子、高橋

敬一、塚本泰造、堀畑正臣、山下和弘の諸先生より数々の貴重な助言

を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

（さかた かずひろ／本学大学院博士課程）